

6 ベクトル空間と内積

復習と確認 6.1 $\{x \in \mathbb{R}^n \mid Ax = 0\}$ の意味は, である.

復習と確認 6.2 $\dim\{x \in \mathbb{R}^n \mid Ax = 0\} =$.

復習と確認 6.3 な が, だけ存在するならば, $n \times n$ 行列 A は, 対角化可能である. すなわち, すべての の集合が, \mathbb{R}^n の となるなら, 対角化可能である.

復習と確認 6.4 $n \times n$ 行列 A が対角化可能となる条件を具体的に述べよ.

復習と確認 6.5 $n \times n$ 行列 A が対角化可能である場合, 線形写像 $f : x \in \mathbb{R}^n \mapsto Ax \in \mathbb{R}^n$ の核は, の固有ベクトルで張られ, 像は の固有ベクトルで張られる. よって, $= \mathbb{R}^n$.

復習と確認 6.6 $n \times n$ 行列 A および B に関して, $\det AB =$ であり, B が正則ならば, $\det AB^{-1} =$ である. ゆえに, A が対角化可能な場合, その固有値を $\{\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n\}$ とすると, $\det A =$ である.

定義 6.1 実ベクトル空間 V の任意の二元 x, y に対して実数 $x \cdot y$ が対応し,

- 分配則 $(x + y) \cdot z = x \cdot z + y \cdot z$
- 交換則 $x \cdot y = y \cdot x$
- 非負性 $x \cdot x \geq 0$
- $x \cdot x = 0 \Leftrightarrow x = 0$
- $(\alpha x) \cdot x = \alpha x \cdot x$

が成立するとき, 演算 \cdot を内積といい, V を内積空間という.

定義 6.2 $\|x\| = \sqrt{x \cdot x}$ をノルム (長さ) という.

定義 6.3 $x \cdot y = 0$ を満たす 2 ベクトルは, 直交するといい, $x \perp y$ で表す.

定理 6.1 シュワルツの不等式 $|x \cdot y| \leq \|x\| \|y\|$ が成立する.

証明 非負性から任意の $\lambda \in \mathbb{R}^1$ に対して,

$$0 \leq (x + \lambda y) \cdot (x + \lambda y) = \|x\|^2 + 2\lambda x \cdot y + \lambda^2 \|y\|^2$$

より, λ に関する 2 次多項式の判別式は常に零か負である.

定理 6.2 $\|x\|$ は, 距離の公理

- (1) 非負性 $\|x\| \geq 0$
- (2) 実定数倍 $\|\alpha x\| = |\alpha| \|x\| \quad (\alpha \in \mathbb{R}^1)$
- (3) $\|x - y\| = 0 \Leftrightarrow x = y$.
- (4) 交換則 $\|x - y\| = \|y - x\|$.
- (5) 三角方程式 $\|x - y\| \leq \|x - z\| + \|y - z\|$.

を満足する.

証明 定義 6.1 から (1) から (4) は自明であるため, (5) のみを証明する.

$$\|x + y\|^2 = (x + y) \cdot (x + y) = \|x\|^2 + 2x \cdot y + \|y\|^2$$

にシュワルツの不等式を用いて,

$$\|x + y\|^2 \leq \|x\|^2 + 2\|x\|\|y\| + \|y\|^2 = (\|x\| + \|y\|)^2.$$

定義 6.4 $i = j$ ならば 1, $i \neq j$ ならば 0 となる関数 $\delta_{i,j}$ をクロネッカデルタという.

定義 6.5 実ベクトル空間 V のベクトル $\{v_i\}_{i=1}^n$ が,

$$v_i \cdot v_j = 0 \text{ for all } i \neq j$$

を満たすとき, これを直交系という. さらに,

$$v_i \cdot v_j = \delta_{i,j}$$

ならば, これを正規直交系という.

定理 6.3 $\{v_i \in V\}_{i=1}^n$ が正規直交基底であるとする. このとき, 任意のベクトル $x = \sum_{i=1}^n a_i v_i$ および $y = \sum_{i=1}^n b_i v_i$ に関して,

- (1) $a_i = x \cdot v_i$

$$(2) \quad x \cdot y = \sum_{i=1}^n a_i b_i$$

$$(3) \quad \|x\|^2 = \sum_{i=1}^n a_i^2$$

が成立する .

証明

$$(1) \quad x = \sum_{i=1}^n a_i v_i \text{ の辺々に } v_i \text{ を内積して, } x \cdot v_i = a_i \|v_i\|^2 = a_i .$$

$$(2) \quad x \cdot y = \left(\sum_{i=1}^n a_i v_i \right) \cdot \left(\sum_{i=1}^n b_i v_i \right) = \sum_{i=1}^n a_i b_i \|v_i\|^2 = \sum_{i=1}^n a_i b_i$$

$$(3) \quad (2) \text{ において, } x = y \text{ とすればよい .}$$

$x \cdot y = \sum_{i=1}^n a_i b_i$ より, x と y が列ベクトルである場合は, $x \cdot y = x^T y$ となることに注意する .

定理 6.4 $\{u_i \in V\}_{i=1}^n$ が基底であるとき, グラム・シュミット直交化

$$\begin{aligned} w_1 &= u_1, & v_1 &= \frac{w_1}{\|w_1\|} \\ w_2 &= u_2 - (v_1 \cdot u_2)v_1, & v_2 &= \frac{w_2}{\|w_2\|} \\ w_3 &= u_3 - (v_1 \cdot u_3)v_1 - (v_2 \cdot u_3)v_2, & v_3 &= \frac{w_3}{\|w_3\|} \\ &\vdots \\ w_n &= u_n - \sum_{i=1}^{n-1} (v_i \cdot u_n)v_i, & v_n &= \frac{w_n}{\|w_n\|} \end{aligned}$$

によって得られる基底 $\{v_i\}_{i=1}^n$ は, 正規直交である .

証明 ベクトル $\{v_i\}_{i=1}^n$ は正規化されているため, 直交性のみを示す . まず,

$$w_2 \cdot v_1 = u_2 \cdot v_1 - v_1 \cdot u_2 \|v_1\|^2 = 0$$

から, $v_1 \perp v_2$ である . 次に, $v_1, v_2, \dots, v_{k-1} \perp v_k = 0$ を仮定すると, すべての $j \in \{1, 2, \dots, k\}$ に対して,

$$w_{k+1} = \sum_{i \neq j} a_i v_i + u_{k+1} - (v_j \cdot u_{k+1})v_j$$

から,

$$w_{k+1} \cdot v_j = u_{k+1} \cdot v_j - (v_j \cdot u_{k+1}) \|v_j\|^2 = 0.$$

よって, $v_1, v_2, \dots, v_k \perp v_{k+1} = 0$.

例 6.1 3次元実空間上のベクトル

$$u_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \quad u_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \quad u_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

にグラム・シュミット直交化を施してみる.

(1) u_1 を正規化して, v_1 を計算する.

$$v_1 = \frac{u_1}{\|u_1\|} = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}.$$

(2) u_2 の v_1 方向成分を減じて, w_2 を求める. また, これを正規化する.

$$w_2 = u_2 - (u_2 \cdot v_1)v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} - \frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{pmatrix}.$$
$$v_2 = \frac{w_2}{\|w_2\|} = \frac{1}{\sqrt{6}} \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{pmatrix}.$$

(3) u_3 の v_1 および v_2 方向成分を減じて, w_3 を求める. また, これを正規化する.

$$w_3 = u_3 - (u_3 \cdot v_1)v_1 - (u_3 \cdot v_2)v_2 = \frac{2}{3} \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}.$$
$$v_3 = \frac{w_3}{\|w_3\|} = \frac{1}{\sqrt{3}} \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}.$$

(4) $\{v_i\}_{i=1}^3$ が直交しているか検算を行う.

予備知識 6.1 $v, u \in R^3$ を2辺とする平行四辺形の面積をその大きさとして, v から u への右ネジの方向を持つ平面 $\langle v, u \rangle$ の法線ベクトルを外積といい, $v \times u$ で表す. $v = (a_1, a_2, a_3)$ および $u = (b_1, b_2, b_3)$ とし, 標準基を $\{e_1, e_2, e_3\}$ とするとき,

$$v \times u = \det \begin{pmatrix} e_1 & e_2 & e_3 \\ a_1 & a_2 & a_3 \\ b_1 & b_2 & b_3 \end{pmatrix}$$

となる.
